

## 中国文学史研究における新しい動向

石川三佐男・趙 凝

## New Directions in the Study of Chinese Literature History

Misao ISHIKAWA and ZHAO Ning

In the late 1980's a drastic change occurred in the study of Chinese Literature History. At a time when research in the field was stiff and conservative, with little theoretical innovation, changes were suggested by way of a trilogy of works by Oo Chooryuu, Professor, Sosyuu University: 1. 中国中古詩歌史 (History of Chinese Old poetry); 2. 中国文化心理研究 (Psychological Studies of the Chinese Early Culture); 3. 文学史新方法論 (New Research Methodology of Literature History).

In this paper, the authors introduce and discuss the theoretical framework developed by this pioneering scholar, Oo Chooryoo, and explain his influence among academic circles through consideration of his position in the history of Chinese Literature History.

## 中国文学史研究的新动向

八十年代末期，苏州大学王钟陵教授以《中国中古诗歌史》、《中国前期文化—心理研究》、《文学史新方法論》三部大作在曾被不少人认为保守僵化，理论改革几乎无望的中国文学史研究界引起了巨大的震动。本文在回顾文学史研究的历程的同时，将介绍并论述文学史研究新时代的旗手——王钟陵教授的理论体系及其为学界带来的深远影响。

ものとなった。

大著『中国中古詩歌史』(1988年, 70万字 以下『詩歌史』と略称), 『中国前期文化—心理研究』(1991年, 60万字 以下『文化—心理研究』と略称), 『文学史新方法論』(1993年, 34万字 以下『方法論』と略称)で国内外の注目を浴びた蘇州大学の王鐘陵教授は, この新思潮の旗手であり, 彼のこの三部作に対し学界は惜しまぬ賞賛を送った。『詩歌史』は, 「卓越した見解と雄大なスケールと精巧な構想を持つ著作である。その迫力ある議論と哲学思想, それから詩的な筆致は面目一新の感じを抱かせ, 中国文学史研究の分野で輝かしい一里塚となった」<sup>①</sup>。「建国以来, 視野が狭く文筆が平坦, 方式が硬直化した文学史著作の状態は王氏の著作によって破られた。……もともと歴史に存在するが, 人々に気付かれなかった多くのことを発見し, 文化—心理の世界を築いた」<sup>②</sup>。「中国文学史の研究は躍進を期待している。近年来, 古い研究方法は次第に様々な面でその限界を露呈してきた。一方, 新しい文学観念・価値観・視点などは文学史の多くの研究課題に著しい進展をもたらし, 開拓精神が

—

1910年, 林伝甲は京師大学堂の講義用として『中国文学史』を編纂した。日本早稲田大学の中国文学史教材をモデルにしたこの書物は中国初の文学史の著作であり, その出現は中国文学史の研究が一つの学問分野として出発したことを意味する。

一世紀近くの歳月が流れた今, 前進が鈍くともすれば保守的で, 変革が不可能ではないかという疑問さえ持たれたこの分野であったが, 新風が吹き始めた。1980年代の半ばから思惟方法・学術的見地・批評的立場など, 先学とはかなり異なる新世代の研究者たちは, 一連の創造性に富んだ理論を提出し, それに基づいた新しい研究成果を次々と発表した。その影響は古代文学史を超え, 現代・当代文学の研究にも及んでいる。莫大な内容を抱え, 数千年も延々と受け継がれてきた文化的伝統が場合によってかえって一種の重荷になりかねない文学史研究には, 新鮮な血液が注がれ, これまでにない活力の溢れた

溢れた文学史著作はこの機運に応じて生れた。若手学者王鐘陵の『中国中古詩歌史』はこのような、斬新な理論構造を備え、文学史研究に対して重大で画期的な意味を持つ著作である<sup>③</sup>。『文化—心理研究』は、「これまでの哲学史・思想史・文化史・心理学史等と全く違う、民族・歴史の文化・心理を研究する新しい道を開いてくれた」<sup>④</sup>。「原始意識から中華思想・文化の根源と分流を探り、その独特な道程を描くのは本書の主旨である。この全く新しい方式は構想が新鮮で、理論の面でも前人未踏の境地に達した。この研究方法を確立したことで、王鐘陵教授は再び苦難に満ちた学術の最先端に立った」<sup>⑤</sup>。『方法論』は、「……上記の二大作の創作実践のもとで文学史新方法論に関して、綿密でしかも極めて整合性と創造性に満ちた論述を行なった。……この新しい方法論体系の出現は一つの新しい学科——文学史学が確立され、その理論形態も次第に成熟してきたことを示している。同時に、王氏の著作の出版は、文学史のニューウェーブが既に深く透徹した理論上の総括を得たことを意味するばかりでなく、これからの文学史研究様式の転換に与える影響も日増しに大きくなるだろう」<sup>⑥</sup>。「これは開拓精神が溢れ、なお内容が綿密で深い著作である。……光緒30年の林伝甲の『中国文学史』を始め、様々な中国文学史著作はすでに数百種余りにも達した。どの著作も必ずある種の研究方法を用いるが、専ら方法論を論じるものはまだなかった」<sup>⑦</sup>。「王鐘陵教授の三部作が学界で次々とセンセーションを起こしたことは、文学史研究が既に新しい歴史段階に入ったことを意味する。……文学史の研究方法を更新し、新しい批評様式を構築した王鐘陵教授の開拓的な功績は、氏の三部作と共に学術研究の歴史に名を残すだろう」<sup>⑧</sup>。

以上の引用は、王氏の三部作に関する書評のごく一部に過ぎない。慎重で古い伝統を大切に、年功序列重視で名が知られた中国文学史の学界が、全国的影響力を持つ出版物(『中国社会科学』、『社会科学戦線』、『文芸研究』等)に、また多くの著名な研究者が一斉に、一人の学者の著作を高く評価したのは未曾有のことである。更に『文学遺産』、『江海学刊』は文学史理論に関するコラムまで設け、『河北師範大学学报』は文学史研究の方向転換に関する論文を毎回載せるほどの盛況である。これらはすべて文学史研究が、紛れもなく新時代に入ったことを示唆している。

## 二

この新しい動向を紹介論述する前に、まずこれまでの中国文学史研究の道程をふりかえる必要がある。

著名な学者・黒龍江大学の陶爾夫教授は、中国文学史

の研究を、創業期(1910~1949)・成型期(1949~1978)・変換期(1978~1988)・突破期(1988~)の四段階に分けている<sup>⑨</sup>。

第一段階、創業期の初め頃、林伝甲・黄人らの文学史の著作は原文の引用のみで、著者本人の論述がほとんど見られなかった。「五四運動」前後、胡適が『中国文学史』『白話文学史』で、初めて「歴史の進化」、「変遷進歩」、「革命」等の原則を提出した。小説の発展変化に対する魯迅の分析もそれまでにないものとされた。胡適・魯迅・聞一多らに続いて、次の三人がいる。それまで見過されてきた変文・戯文・諸宮調・民歌等をも大いに評価し、文学史の視野を広げた鄭振鐸は『插图本中国文学史』を著した。初めて社会学の批判様式や文学観念を部分的に取り入れ、政治経済・社会生活・学術思想が作家作品に与えた影響を詳しく分析した劉大傑は『中国文学發展史』を書いた。上古・中古・近古という時代区分を放棄し、「啓蒙時代」、「黄金時代」、「白銀時代」、「暗黒時代」という理論の枠組を独創的にし、「建安風骨」、「盛唐氣象」、「少年精神」など高度に概括された概念を提出した林庚は『中国文学史』を出した。それぞれ高い学術的価値を備え、後の研究に多大な影響を与え、その時代の代表作となった。全体から見れば、この時期はまだ模索の段階で、理論的枠組がまだ確立されていないが、社会・政治からの干渉はほとんどなく、学問の自由も比較的に保たれてきた。多面的な研究もあれば、深層の規則的なものに対する探求もあり、百花斉放の局面を呈していた。

第二段階、成型期の初期は、ソ連の研究様式をそのまま取り入れた。文学史は、イデオロギーに属し、イデオロギーが社会の経済基盤によって決められるという考えから、文学史の発展変化が政治闘争、階級闘争と結び付けられた。文学の経済や政治による影響が極めて大きいのが、その側面のみ強調されるので、文学自身の規則性が無視されがちであった。芸術性に関してロマン主義にも言及するが、リアリズムが正統派とされたのはこの時期の特徴であった。それ故、文学が人民大衆であるか否か、リアリズムであるか否かは、古代の作家作品を測る唯一の基準となった。

しかし、このような極めて困難な状況にあっても、大学の共通教材に指定された科学院文学研究所の『中国文学史』(1962)と游国恩主編の『中国文学史』(1963)が出版された。この二大作の出現は、「文学史の研究と編纂は、科学、体系、文体の面ですでに一定の形式になったことを示し、その実用的価値も高い。その後出版された多くの文学史著作はこの二作の基本様式を超えていない」<sup>⑩</sup>。しかしマルクス主義の歴史唯物主義と唯物弁証主義を指導思想としたこの二作は、限界のあるものであった。

文化大革命の開始後、社会的政治的介入は一層広まった。文学史研究は「儒法闘争」を原則とせねばならず、低俗の社会学に陥って、完全に政治権力闘争の道具と化してしまった。劉大傑が『中国文学発展史』を書き直したのは、その時期の典型的な出来事であった。「低俗社会学の氾濫に於て、我々はソビエトよりもっと行き過ぎ、大勢の文学史学家的な学術の青春を無駄にしてしまった。この30年間、本当の意味での個人、単独で完成した文学史著作は一冊も出版できなかったのである」<sup>9)</sup>。

第三段階の転換期は、80年代前半の思想解放運動と共に始まった。西側の様々な文学思潮・観念が新大陸のように中国の学者たちの前に現れ、新批評主義、構造主義、解構主義、心理分析、記号学、現象学、解釈学、原型批判、読者反応批判、ポストモダニズム、新歴史主義などの諸理論の影響がとりわけ大きかった。その上、社会全般に空前の「美学ブーム」、「カルチャーブーム」を巻き起し、学界に与えた衝撃は想像を絶するほど大きいものであった。人々は低俗社会学の毒を一掃し、古い思惟方式や遅れた理論の枠組を破ろうと試みた。大学が各自の文学史教材を編集し、学術上の個性を存分に発揮した個人の著作も出回った。文学史の研究と編纂は多次元の状態を呈し、新たな百花斉放の盛況を迎えた。

しかし同時に、有効で整った理論構造と批評様式がまだできていないため、文学史研究の更新は表面的、局部的、個人的な実験に止まった。それ故、中国文学史の歴史や内容の実際と必ずしも完全に適応するという訳でもない西側の文学理論を、うまく消化することができず、立ち遅れた考え方や研究方法を取り除くのではなく、ただ新しい用語の羅列が目立った。「方法論」ブームを引き起こしたこの時期に、伝統的な研究方法に対して虚無的な態度で完全に廃棄しようという主張もあり、浮わついたムードが全体に広がっていた。一方、全般的な西洋化に対する反動から、新しい方式を一切排除し、あくまで「国学伝統」に従う傾向も台頭した。

中国文学史の内容・性質に合致し、その文化的伝統と現実から抽出した新しい文学史理論が待ち望まれるこの時期に、王鐘陵氏の著作が誕生したのである。

「我が古代文学史の研究と教育を大きく突き破らなければならない」<sup>10)</sup>、『詩歌史』も『文化—心理研究』もこの一文句でスタートしたのである。そのためであろうか、王氏の理論で幕をあげた新しい時代に対して陶氏は「突破期」と名付けた。

「1988年、王鐘陵氏の『中国中古詩史』の出版が突破期の到来を意味している。王氏の著作はこれまでの体系・構造・方法を面目一新した。……その後、引き続き出版された『中国前期文化—心理研究』、『文学史新方法論』は前作で挙げた成果を一層拡大強化し、最終的にこ

れまでの文学史著作と全く異なる文化—心理の批評様式を確立した。この点について、王氏の三部作を貫く整合した理論体系、斬新な論理構造、概念範疇と命題との内在関係、突っ込んだ論述、及び実際の運用操作を見れば、一目瞭然である」<sup>11)</sup>。

その他にも、程千帆・吳新雷の『兩宋文学史』(1991)、袁行霈・孟二冬・丁放の『中国詩学通論』(1995)、章培恒・駱主明編集の『中国文学史』が、それぞれ違う側面で新しい理論観念を提出し、突破期の研究を促進したのである。

### 三

この百年近くの文学史研究が辿って来た道をふりかえって見ると、紆余曲折しているが発展進歩も大きい。しかし全体から見れば、80年代の半ば頃までの文学史研究は、作家作品、或いは流派に達するぐらいのものが一般的で、理論形態を持つ大作はほとんどなかった。正に王鐘陵氏に指摘された通りに、「今日に至って中国古代文学史はまだ科学以前の状態にある。その重要な標識の一つは即ち、中国古代文学史がまだ民族の審美活動の発展を反映する科学的概念・範疇・命題の、有機的かつ整合されたシステムを形成していないことである」<sup>12)</sup>。

科学以前の状態とは、具体的に観念と研究方法の立ち遅れを指す。

観念の立ち遅れは、新しい理論体系の樹立どころか、新しい概念・範疇・命題の提出もめったに見られないところに現れる。西洋から搬入した新しい言葉を羅列し、文学理論を機械的に当て嵌めても、研究は軽薄に流れてしまうだけで、民族文化・心理の深層まで及ぶものではなかった。

研究方法の立ち遅れについて、王氏は以下の五点にまとめた。一、理論の内在的連繋が欠け、形式的で創造性のない編集と叙述。二、個別の例で全体を概括しようとする傾向。三、政治思想の分析で芸術分析に代る硬直した手法。四、反動的または価値がないと判断された作家作品及びそのような時代に対する抹殺。五、煩瑣で微視的な研究視野<sup>13)</sup>。

このような状態をどう打開するか、学界全体はその糸口を探った。

様々な主張がある中で、まずほぼ共通の認識を得たのは、西洋の理論体系をそのまま中国の文学史研究に取り入れるのは得策ではないということであった。国によって歴史伝承も違えば、現実の社会政治環境も違う。それ故に、理論の需要もその展開も同様ではない。事実も誠にその通りで、今世紀中国と西側の文学理論の発展過程はかなり相違するものであった。

今世紀の初め頃、西洋の文学史研究はロシア形式主義・新批判が盛んであった。西側が形式批判を重視し、歴史分析の代わりに文学分析が主流であったこの時期に、中国の文学理論は社会・政治との関連を見出すことに励んでいた。百日維新の時から既に小説を政治改良の宣伝道具として利用しようとしていた。「五四運動」前後、胡適が『文学革命論』を発表し、貴族文学の打倒と庶民文学の樹立を呼びかけ、進化論方式や社会学方式の発端となった。

西側は構造主義・解構主義などを経てポストモダニズムへと移行する50年代以後、作品自身の重要性が益々強調され、文学は外部との関係があまり言及されなかった。一方、中国の文学史研究は数多くの政治運動に巻き込まれた結果、低俗な社会学の氾濫を招いてしまった。

70年代の末から、西側では解釈学・新歴史主義・女権主義などが勃興し、文学に関する学者らの興味は、修辞学の内部研究から歴史・心理学または社会背景の中での位置付けに転換した。一方、ちょうど同じ時期、文革が終結した中国の文学史研究界も大きな転換期を迎えた。しかし西側と正反対で、研究の中心は文学の内面から外部との関連へと移るのではなく、長期間に亘って文学研究が政治に奉仕するという原則から生れた「陰謀文学」からの脱却、低俗社会学からの脱却に努めていた。研究者たちは「芸術に潜んでいる様々な美学の要素に目を向け、本当の内在的な規則を発見しようとした。このような目標を目指しているため、彼らは外部から加えられた非文学的な束縛を廃棄し、これまで慣れてきた一方通行の思考様式に満足できなくなった」<sup>⑩</sup>。それ故に、西側の新歴史主義・女権主義批判のような強烈な用語は、かえって中国の学者にとっては共感が少なく、むしろ殆ど使用しなくなった階級闘争時代の言葉の余韻を思い出させてしまう。

当然、このような社会政治環境の要素のほか、理論形態の相違は東西の文化伝統とも深い関連がある。河北大学出版社副編集長の彭黎明氏は解構主義を例として分析する時、次のように述べている。「西洋文化は理性が発達しており、非論理化は彼等にとって一種の矯正と補充である。一方中国は昔から直覚思惟が優れているが、模糊性は我々が克服しなければならない欠点である」<sup>⑪</sup>。

中国文学史研究は独特な発展の道をたどり、独自の理論構造を必要としている。そのため、学界全体は方法論の更新に注目した。王鐘陵氏も方法論の更新を大いに提唱する一人である。王氏は『方法論』の「序言」で次のように述べている。

中国文学史の新天地を開くには、歴史哲学と方法論を工夫しなければならない。科学に欠けてならない重要な特徴の一つは、反省のメカニズムである。

科学研究の有効性という前提と研究成果の科学基準を示すのは、その目的である。このような目的を実現するために、最も適切な形式は、方法論に対する探求だと言えよう。しかも歴史が対象である学問にとっては、研究をより効果的なものにするために、その探求を歴史哲学の視点まで高めなければならないのである。

80年代から始まった文学史上の新潮流の最も重要な特徴は方法論に対する探求である。筆者はある若手学者の著作の序にこう書いた。「学者のそれぞれ異なる趣は、往々にして違う方法論によって現れて来る。手法が新しいものか否か、高水準で成熟したものか否かは、その方法論で見分けることができる」。いわゆる方法論とは即ち文学史学であり、つまりいかに文学史を科学にするかという学問である<sup>⑫</sup>。

これで「文学史学」という概念は初めて王氏によって提出された。それに関して王氏は具体的に次のように述べている。

……徹底的に文学研究の独立した品格を樹立することを期待する。文学史研究は、イデオロギーの外の分野・部類・分岐からの独立性を持つべきであり、いつも他の学科に依存し、他の学科に奉仕しているうちに自らの存在を葬ってはならない。自らの学科理論——文学史学を創立し、哲学と文学との結合から文学史学の中核でもある文学史方法論を構築すべきである。作家作品の研究は文学史研究の堅実な基盤及び主な内容であるが、文学史学家の視線は作家作品を越えて、思想の光で歴史の流れを照らさなければならない。それ故に、文学史の研究は作家作品の後を追う食客のような身分から脱却して、ただ政治的理念を重複する個性のない下僕意識と、芸術分析をただ幾つかの平凡かつ軽薄な概念の充填に用いる状態を変えなければならない。文学史は、民族の精神と審美の歴史が無秩序の混沌から伸介と動力構造を経由して至った確定と不確定を一身に融合したロジックの展開でなければならない<sup>⑬</sup>。

王氏によって提出され、しかも学界で広範な支持を受けた文学史方法論革新の中核の一つは、「史の研究は即ち理論の創造」という原則である。

#### 四

「史の研究は即ち理論の創造」という説の理論的基盤は、歴史真実の二重存在という原則である。この原則は文学史観に関する論争から生まれたのである。1988年鏡泊湖で開かれた「文学史観と文学史」の討論会でも、1990

年桂林で開かれた現代・当代文学研究者を中心とした「全国中青年学者文学史討論会」でも、一体文学史が主観的なものかそれとも客観的存在かという、昔からずっと明白な結論が得られなかった問題が、またホットな話題となった。前者は文学史の客観性を強調し、反対に後者はその主観性を主張する。この問題は正に文学史研究の理論基盤とも言えるだろう。

歴史が一体どのように存在しているか、この基本的な歴史観の問題を解決しなければ、文学史研究の躍進は望めない。歴史重視派、ロジック重視派、歴史とロジックの統一を目指す虚実兼重派等々、学者らは様々な試みをしてきたが、いずれも二元対立か折衷した二元対立の枠を越えていなかった。このような状況の中で、完全に二元対立をなくした歴史の二重存在という原則の提出は、当然学界で大きなセンセーションを巻き起こした。

悠久な史官の文化的伝統を有する中国では、自然に大多数の人は歴史の客観的存在に執着する。乾隆・嘉慶時代の『四庫全書』のような純客観論の学風は、言うまでもなく後世の文学史研究者に深遠な影響を与えた。だが一方、実用主義者胡適の目には、歴史は「大人が自由気ままに飾ってあげる小娘」であり、つまり主観的な面目しか持たないのである。実は中国は昔から研究客体が完全に中心となる「我注六経」と、完全に研究主体を中心とする「六経注我」という二つの研究方法があるが、いずれも歴史を一重の存在として認識してきた。前者は狭くて保守的な見解を導きやすいのに対し、後者は研究対象を歪曲し軽薄な学風を避け難いと、王鍾陵氏は批判した<sup>④</sup>。

王氏は自らの三部作を通じて、『史記』『文心雕龍』『四庫全書』等中国の伝統的な研究方法だけではなく、魯迅、聞一多、それからイタリアの哲学者カロジェロ、美学者ブイカ、フランスの人類学者マーク・カブリヨ、アメリカの人類学者ハーヴィラン、イギリスの哲学者カール・ポプらの論説をも分析比較した。最も貴重なのは、これまで中国ではタブー視されてきた經典的な哲学思想——モールゲン、ヘンゲル、マルクス、エンゲルスの歴史観と論理学に於ける偏執と時代による局限性にもメスを入れたことである。このように前人の精髓を吸収、不足を補填した上、1988年の『詩歌史』で王氏理論の出発点ともなる歴史真実の二重存在原則が提出された。

私から見れば、歴史の存在は二重となっている。歴史はまず過去の時間と空間に存在する。これは歴史の第一の存在状態であり、客観的で原始的な状態である。このような過去の時空に於ける存在はすでに歴史の積み重ねに埋没されていく。しかし書籍や文物、及び我々の生活や思维様式には依然としてその痕跡が残っている。歴史の真実はその痕跡を復元

させて得たものである。それによって歴史は第二の存在状態を備える。即ち歴史は人々の理解に存在する。保存されたすべての歴史遺産は、それを産出した環境背景を離れると、往々にして複合的でなお見込みのない、密封された意味の総合体と化してしまうため、解釈学に広い天地を残してくれた。……前人に対する解釈の中で、必然的に後世の人の様々な理解を帯びる。思想文化史は正に後世の人が祖先の遺産に対する創造性に富む発掘の中で前進するのである。<sup>⑤</sup>

歴史はそれぞれの時代の角度から認識されるため、いつも異なる容貌を持って現れる。それ故、どの時代も独自の歴史観を樹立することができる。つまり真実の歴史は存在するが、歴史の容貌が変動するのである。しかし、歴史のこの第二の存在状態に関しては、王氏は極めて慎重であった。時代によって歴史に対する人々の理解は大きな差があり、甚だしい時には正反対の場合もある。それでも、歴史の真実は歴史に対する理解にあると単純に断言してはならないと注意した。

……歴史に対する異なる理解の原因は、歴史遺産の異なる側面が違ふ人々によって反映されたことによるものもあれば、反映者自身の主観的観念の染色によるものもある。歴史上多くの人は当時の利益(進歩的もしくは反動的なもの)のために、歴史を歪曲したことがある。康有為はかつて変法の宣伝のために、儒家の古文学の経書が劉歆の偽造だと攻撃した。しかし時が経ち状況が変わると、歴史の真実はやはり真実であり、歴史は人の歪曲を突き破る強い性格を持っているのである<sup>⑥</sup>。

客観性に対する要求が、すべての科学の第一の原則である。王氏も歴史の第一の存在を研究の基本にした。

今日我々の歴史遺産に対する研究はまず、昔の人が周囲の世界をどう見ていたのか、特定分野の特定現象をどう見ていたのかという問題を基本にし、そこから昔の人の理論がどのような社会歴史条件のもとで、どのような思想の影響を受けて形成したのかを説明していく。こうして初めて客観的に前人の理論を理解し、その精髓を取り残滓を捨てることができるのである<sup>⑦</sup>。

歴史の第一の存在状態のため、どの時代もまた完全に前代の研究成果を否定できず、多かれ少なかれ前代の恩恵を受け、伝承していかなければならないのである。それ故、王氏は伝統の批判的伝承について非常に重要な位置付けをしている。「乾隆嘉慶の伝統を受け継いでいかなければならない。しっかりと乾隆嘉慶の基本を身につけないと、本当の意味で古典、特に先秦の文献を理解することができない。もし先秦の文献に対して確実な解説、

認識がなければ、文化思想の研究ないし文学の研究はしっかりとした土台を築くことができないのである」<sup>26</sup>。

王氏の理論は自らの実践から概括したものと云えよう。例えば、詩歌の時代区分について、清の朱庭珍は『筱園詩話』で「古今大家，至曹子建始。……自建安作者，始有以詩传世之志」と述べた。朱庭珍が挙げた八大家は曹植から始め蘇東坡で終わり、南宋以後の詩人は一人も入っていない。聞一多も「東漢献帝建安元年から唐玄宗天宝十四載（196～755）の559年間は中国詩歌の黄金時代」と見て、「……詩の発展は北宋に至ると、事実上は既に終わってしまい、南宋の詞は強弩の末に過ぎなかった」、更に明清以後の多くの詩歌運動を「無駄なものがき」<sup>27</sup>とした。内容は朱庭珍とほぼ同じで、つまり両方とも建安文学を文の自覚の時代としてとらえた。ただ後者の視野はより広くて時代区分という近代科学の概念を用いた。このような見方を受け継ぎ、また明清学者の「詩至於宋，性情漸隱，声色大開，詩運一転関也」という見解を参考にして、独創的に、建安から唐の間の晋宋に於いて更に境界線を引いた。

## 六

文学史研究の突破期の始まりは、文学史の単純な編集と記述の時代がすでに終わったことをも意味する。「文学史新時代の旗印には‘理論’という二文字が描かれている」<sup>28</sup>と宣言した。この新しい時代のロジックの出発点である歴史真実の在り方という問題が解決された後、必然的に「史の研究は即ち理論の創造」という説を引き出した。

劉勰の『文心雕龍』、鍾嶸の『詩品』のような理論性の高い著作もあるが、詩話・詞話・曲話等のような古典文学体裁は芸術的感受性の叙述を重視するため、その内容と文体自体が理論を重視しない散漫性を有している。王氏はそれを「中国式局限性」と名付けた。直感で芸術を把握する能力は非常に大切であるが、理論性に欠け、芸術的感受性のみでは中国特有の局限性を破ることができない。この点に以前から気がついた学者もいる。王国維はかつて、「我が国人の特質は、現実的で通俗的である。西洋人の特質は思弁的である。……抽象と分類は国人の不得意なところで、しかも我が学術界でも未だにそれを自覚していないのである」<sup>29</sup>。

理論性の欠如は、これまでの文学史著作が往々にして作家論の無機的な集合に過ぎないところに表われている。「個々の作家論は一個一個のジャガイモのように、麻袋にいっぱい詰めると文学史になる」<sup>30</sup>。文学史著作の形式は、「作家・流派（または団体）であろうと文学現象であろうと、①時代背景、②作者の生涯、③思想内容、④

芸術の特色というような‘四段式’であると、揶揄する人が多い。具体的な状況を分析し、その合理性も認めなければならないが、少なくとも我々の文学史学者は創造性が乏しく、著作は堅実な論理構造に欠け、単調で生気がない証明であろう」<sup>31</sup>。

中国の学界は歴史とロジックの統一についても語ってきたが、深切な討論を行わなかった。王氏は初めて歴史とロジックの統一を二つの形態に分けた。歴史を出発点とする統一とロジックを出発点とする統一とに。しかも歴史の縦の流れを意味する「通時性」と横の展開を意味する「共時性」がロジックとの関係において、『方法論』によりその極めて繁雑で困難な立証を完成した。この理論の提出によって、先在性・目的性・絶対性及び外部から押しつけられた規範性・抑圧性が排除され、随意性・偶然性や個人の役割をもロジックの枠組に編入した。それで歴史運動の軌道は、多くの枠組の矛盾が交わり、周縁と中心が絶間なく変換する種々の発展方向を持つ立体的なものとなった。

このようなロジックをたどって行くことにより、これまで見過ごされてきた文学発展の要因の内在的脈絡も浮上し、その歴史に於ける重要な役割も究明されることができた。

例えば、劉宋時代に於ける謝靈運・顔延之・鮑照の三派の文学思潮の闘争に関する王氏の分析<sup>32</sup>は、よくこの理論の特徴を反映している。主流・支流の複雑な移り変わりから、齊・梁時代の新たな文学思潮論争の幕開けへと論理的に論述し、しかも初めて主流であった「新変」と異なる「通変派」という支流を発掘した。「人々は後者が一つの流派に構成できるか否か異議を持つことができるが、でも当時は風潮矯正の意味を持つ新しい動向が出現したことは確かであった。この点についてはこれまでの人々が気付かず、王氏による新しい発見と言えるだろう」<sup>33</sup>。

このような、歴史の多次元の運動軌道を視野に入れ、厳密で論理的な論述は終始王氏の研究に貫かれている。それから、学界に大きな衝撃を与えたもう一つの見解は、これまでさほど重視されなかった東漢の王充の「真美」観を中古詩歌史の論理上の出発点としたことである<sup>34</sup>。

王氏はまず「真美」観が生れる社会的思想的根源を詳細に分析した後、さらにそれに潜む二つの内面性を発見した。即ち讖緯思想的「虚妄の美」の審美観と戦い、ありのままに事物を見るように要求する外向きの面と、独自の個性を発揮し、ありのままに作者自身の思想感情を表現しようと要求する内向きの面とであった。それは「真」に統一された主体と客体であるが、矛盾・対立もしている。

主体の内在感情が強過ぎると、客体はただ主体情

感の媒体だけになりがちで、単独に観察される地位を獲得し難い。一方、客体に対する精密な描写は主体感情の比較的な稀釈を求める。真実の美を求める理性と個性が次第に目覚めてきたのは、漢末・魏晋の動乱の時代であった。それ故、生や死、物事の移り変わりに由来する重苦しい感傷的なムードは社会全体に広がり、上述した主客体間の矛盾が大いに強められた。感傷の思潮があれば自然に感傷を解消する努力が現れる。前者は情感、後者は理性で、また一組の矛盾を構成した。これらの要因で、自然の美に対する認識と鑑賞が文化の主流になるのは不可能であった。矛盾の展開はまず必然的に主体内部の情感と理性の推移から始まり、それから主体から客体へと進むのである。それ故……「真実の美」という論理の出発点の中で三つの要素が育まれていると認識できる。一つは情感と個性豊かな気骨の要素、それは物事の移り変わりに対する感慨に由来した悲しみと深く関連する。もう一つは感傷の思いを解消する理性の要素、三つ目はありのままなる外物描写による言語の精緻さを追求する要素である。<sup>⑧</sup>

この三要素の間の矛盾展開に関する分析を通して、文人化・玄言化・通俗化・南北詩歌の融合という魏から隋までの四つの段階をまとめ、中古文学全体の特徴と発展の規則を呈示してくれたのである。

『方法論』の第七章「文学史運動の内在的メカニズムと外部形式」と第八章の「錯綜混乱の文壇の栄枯盛衰」では、作家・作品が歴史の縦の「原生態式」運動に於ける当世での広がりや後世への伝達、文学史運動に於ける偶然的要素の役割、解説されていく過程に於ける変異、文壇の栄枯盛衰の内在的メカニズム等、これまでの研究が見過ごしや配慮しなかつたりした問題についても、膨大な史料に基づいて論理的に分析し、独創的な見解を示した。

このような論理構造に対して、学界は大いに評価した。「……適当な論理構造で歴史の弁証法的運動を反映するという問題は、これまであまり重視されなかつた。このようなチャレンジをなした古代文学史の著作は未だかつてなかつた。論理構造の問題を中国文学史の著作法に取り入れたのは王鐘陵の独創だと、客観的に認めなければならない」<sup>⑨</sup>。

## 七

「史の研究は即ち理論の創造」という原則と並んで、王氏理論のもう一つの柱は整合性の原則である。

両者は相関連するものである。なぜなら、理論の創造は必然的に史料に対する全面的な把握を求め

る。

横から見れば、人類生活の各方面はもともと一つの大きな有機的なシステムに属し、文学は最初から全体の文化活動の重要な一部分である。縦から見れば、文学の発展はまた内在的なロジックを持つ有機的な過程である。注意すべきなのはいかなる歴史段階でも、現実の発展過程に於て随意性と偶然性が存在し、歴史の必然性が正に様々な随意性と偶然性の要因を通じて自らの発展の道を開拓しているのである。しかし、随意性と偶然性の要素の積み重ねは往々にして歴史の具体的な行方に強烈な影響を与えることがある。理論的に言えば、歴史のどの段階でも異なる展開となる可能性が幾つも存在する。しかし、「もしも」のない社会生活のどの部分も互いに因果関係を以て進化している。一旦歴史が過去の時空に形成、また消滅していくと、固定して逆転不可能な存在となってしまうのである。

上述の如く、横と縦の展開の両方が原因で、文学の道程を把握する時、整合性を強調しなければならぬのである。<sup>⑩</sup>

陶爾夫氏は整合性の原則に関して次のように簡潔にまとめた。

いわゆる整合性とは過激、無知、一面的にならないことである。全体性に富む研究とは、即ちまず研究対象をばらばらにしてから考察し、それからまた各部分をまとめて一つの整合体にするというようなやり方ではなく、初めから全体に着目し、高所に立って統一的な企画を立てることである。整合性の性質や役割は、各部分が互いに関連し、互いに作用し合う運動の中に存在するため、単独の各部分にはない効能を備えている。文学史の発展は有機的かつ整った過程であり、個々の時代と個々の作家の組み合わせではない。それ故、整合性の原則は、史料を総合的に把握したうえで、文学史が他の多くの社会的文化的要素との共生関係、因果関係、相互の影響・融合等の関係に対して明白で突っ込んだ認識を持つことを、研究者に求める<sup>⑪</sup>。

これまでの研究は、単純に精髓と滓に分けて、当時の歴史現実から遊離してしまうことが多い。結果として、「文学史著作は著者の人生観・世界観の拡大に過ぎず、当然ながら優れたものの陳列となってしまう。これは中国古代の詩と教育を同次元でとらえる伝統と一脈通じるものであり、実は‘絶対理念’で文化研究を先験化、道徳化する歴史の負の遺産である」<sup>⑫</sup>。

王氏は自ら提出した整合性の原則に基づいて明らかに弱点や不足のある文学現象に対しても改めて考察し、上述したような欠陥を避けることができた。

例えば、東晋の玄言詩に関して、かつて劉勰、鐘嶸の時代からずっと「理をもって詩に代え」て、大きな失敗だと批判し、玄言詩が流行していた百年近くの文学史的意義を抹殺してきた。しかし、王氏は『詩歌史』の下巻で全一編を費して、東晋玄言詩の盛衰の根源、風格情緒、及び山水景物の描写に表われる特殊な文化思想などについて詳細な論述を行なった。詩の趣の開拓、感傷的情調の弱体化、後の山水文学への大きな影響等々、玄言詩の効能を評価した。詩に理念を導入することによって、文学の風潮に大きな転換をもたらしたと、玄言詩を位置づけた<sup>⑧</sup>。「もし歴史の関連を全体的に見なければ、玄言詩の価値は恐らくその限られた芸術性によって永遠に埋没され、人々に理解されないだろう」<sup>⑨</sup>。

玄言詩の他、歴代の評論家に「恥の淵」として排斥されてきた梁陳時代の宮体詩に関して、近年来その価値の再認識を呼び掛ける人もいるが、道徳の枠組みを越えていない。しかし、王氏は『詩歌史』で二章を費して宮体詩を分析した上、芸術への頹廢的な探求の中に歪められた前進の歩みがあり、宋齊の永明体に次いで詩歌の新たな大きな変革だという結論を出し、詩歌が唐の初期へと展開する上で欠くことのできない重要な一環であるとして位置づけたのである。

整合性の原則に基づいて、各時代の有名な作者のみならず、これまで人々に注目されず、殆ど忘れられた作者をも視野に入れ、彼らの文学史に於ける地位及び功績を人々に示してくれた。それから『方法論』の第九章「文学史運動の仲介と動力構造」で、これまでずっと重視されなかった全集が詩歌の発展に果たした役割を大いに評価した。また詩話・詞話・小説の編集・「評点」から影響を受けた一時代の風潮、それによって次第に確立してきた美学的伝統、及び文学の流派と文学史の概念の形成、文学の解読様式の確立などの問題についても、それぞれ莫大な史料を引用しながら全面的な論述を行なった。これまでの作家・作品のみを注目がちの研究と異なり、創作・評論・編集（古代書籍の発掘も含め）という互いに平行、浸透しあう三つの分野を同時に把握している。これによって文学史研究を大幅に広げることができた。

## 八

『詩歌史』のサブタイトル「四百年民族心理の展示」とその次の大作『文化—心理研究』というタイトルからも分かるように、王氏は民族の文化・心理構造に対する探求を文学史研究の中心的な課題としている。

論理構造の確立が概念・範疇・命題の提出や解釈と切り離し得ないのは明らかである。しかし概念・範疇・命題の提出や解釈もまた民族の文化・心理構

造に対する理解と関連がある問題である。文学の進展はいつも民族心理・思惟の発展過程と一致するものである。……それ故、民族心理・思惟の角度から文学の進展を把握しなければ、その最も深い蘊蓄を知ることができないのである。<sup>⑩</sup>

「史の研究は即ち理論の創造」及び整合性の原則を土台にして、これまでの文学史著作と性質を全く異にする文化・心理構造の批評様式が、王氏によって初めて確立された。

民族の心理・美意識のメカニズムの解明という命題は、文学作品及び文学史の変遷の根源を捉えただけでなく、その研究を深化した。即ち高い次元で文学と哲学・歴史学・美学・社会学・論理学・心理学・民族学など他の分野との関連を幅広く開拓したのである。

『文化—心理研究』の研究方法は存在主義・構造主義など他の流派との相違についてそれぞれ説明がある。また、文化人類学派・精神分析学派との違いは次のように紹介された。

王鐘陵教授自身の説明によれば、文化人類学派が注目するのは、道具の運用、生産の状況、行為の方式、風俗習慣等を総合した文化の発展であるが、彼が関心を持つのは文化の発展と関連する人類深層の精神構造の形成と変化である。精神分析学派が注目するのは潜在意識の究明と夢の解析であるが、彼が関心を持つのは時空概念、生死観、宗教観、悲劇感のような深層心理及びそれらの相互関連である。それから、精神分析学派が注意を払うのはいわゆる人類意識である。例えば「マザーコンプレクス」「ファザーコンプレクス」のような意識は国のみでなく時代をも超えるものであるが、彼の研究は横と縦の歴史の展開の統一に対してより興味を持つ。時空観念も人類共有のものであるが、特に力を入れるのはその普遍性と特殊性との結合で、更にこの角度から特定の民族性を認識することである<sup>⑪</sup>。

王氏が提唱したこの哲学の色合いを帯びる研究目標は、研究の中心が作家・作品から民族文化・心理の深層へと進展することを意味する。即ち「文学史は古典‘文苑伝’の現代版でなくなり、幾人かの作家の生涯の記録でなくなる。それは一種の文化、一種の文明の展開軌道に沿って歴史の蘊蓄を探り、その発展変化を規定する歴史の様々な内在的動力を発見するものである。これはほんとうの意味での整合性と見えよう。……長い時間帯への探険はもともとと古代文学研究が先天的に現代文学・当代文学より勝れたところであるが、残念ながら我々は長い間それに気がつかなかった」<sup>⑫</sup>。民族文化・心理構造に対する解明と開拓は今後の研究方向の主流となるだろう。

副題通りに『詩歌史』も、民族の心理・美意識のメカ



ニズムの解明を軸とする著作である。著者のこの主旨はまず本書の構成に表われている。この著作は、中古時代全体の美学風潮の盛衰交替や文学的特徴の変化推移を論述する上巻と、詩歌発展の道程と詩人・作品の芸術的特徴について詳細で突っ込んだ考察と分析を行った下巻からなる。つまり著者は年代による作家作品から論述に入るという慣例を破って、時間の順序ではなく文学史の発展に潜む内在的論理のメカニズムに基づいて全書を構成した。

建安元年(196年)から大業十四年(618年)まで四百年余りの詩歌史の道程をたどってきたこの大作の上巻は、魏からではなくその前の時代漢の人々の美学観念に対する分析から始まったのである。漢の讖緯思想的美学観の終焉であり、「民族の理性を高揚した」王充の「真美観」を次の時代、魏晋南北朝の文学思潮の出発点とした。更にこの軸に従って「動情と気骨」「真実と形似」、「新変と精緻」の三章を通じて巨視的に中古時代の詩歌の特徴を論じた。第四・第五編で「簡約」の気風はいかに「我が民族の美的知恵の成熟を示した」劉勰の「以少総多」の審美原則を引き出したのか、美の趣がいかに漢の「麗」から「秀」へ、美の理念がいかに「真美」から「隠秀」へと変わったのか等の問題について理論的に説明した。

下巻はこの時代の具体的な文学現象について論述するものであるが、やはり詩人たちの心理分析を重視し、文化・心理構造の横と縦の形成展開に力を入れている。例えば、田園詩人としてのみ見られがちな陶淵明の詩を玄学概念「淡」と結び付け、玄学思想が謝靈運の山水詩に与えた影響、南朝詩人が自然美を表現する時に示した「静態・清趣・光感」の美意識など、王氏によって初めて提出された見解が多い。

「史の研究は即ち理論の創造」という原則は、中国の伝統的な美学範疇の伝承と開拓の面でもよく表われている。「真美・以少総多・隠秀」のような高次元の範疇から、「淡・俗・清峻・遙深・平秀・永明体・吳均体」のような副次的範疇までいずれも伝統的な形態と風格を持っている。「……前人の理論の結晶から取り上げたものもあれば、当時の広い意味での審美風潮から概括、抽出したものもある。例えば、漢の文芸思潮から抽出した、その特定の歴史段階の審美範疇「麗」、また中古時代の人物・芸術・風景に対する鑑賞趣味から概括した当時の審美情緒「秀」等々」<sup>④</sup>。

それから、『文化—心理研究』では既に、父系の家族制度を土台とした血縁と地縁、政権と族権の関係から生まれた民間文学、廟堂文学、家族文学について語り、『詩歌史』でも社会・人生・運命・友情などの深い感慨による題材を重視し、男女の情愛を歌う題材を軽視する傾向の原因について論述したが、『方法論』では更にこのような

東洋の国家形態によって決められた中国文化人の生活環境を分析し、大量の史料と文学現象を取り上げながら、文学史形成を三段階に分けた。家族文学と宗族文学との総合体は最初の段階、郷里文化と地域文化の終結はその次の段階、師友交際と結社から生まれた文化団塊は前の二段階の狭い制限を越え、国という断面に浮上して最終段階となる。三者は同時に発生し、互いに衝突、融合し、ピラミッドの形になっている<sup>⑤</sup>。民族の文化心理・美意識のメカニズムの解明・発掘に関して最も高く評価されたのは、王氏によって初めて提出されたこの「家庭色調・郷邦文化・師友唱和」が文学史に対して持つ強い影響である。

中国の文学史研究の歴史をふりかえって見れば、「史の研究が即ち理論の創造」原則、整合性原則、民族文化・心理構造の批判様式を提出した王鐘陵氏は、確かに文学史研究のニューウェーブの旗手という呼び名に相応しい。「一代の怪傑」<sup>⑥</sup>王鐘陵の研究が「魯迅の深さと聞一多の精巧さを兼ね備えている」<sup>⑦</sup>という評価も決して過言ではない。その影響は時と共に更に深まり、既に幕開けした中国文学史研究の新時代もきっと限りなく明るい将来があるであろう。

## 注

- ①④⑦ 「関于“重写文学史”」『中洲学刊』1994. 5.
- ② 霍松林 「古代文学研究的重要開拓」『學術月刊』1990. 10.
- ③ 張 晶 「文学研究的重要突破」『中国社会科学』1990. 2.
- ④ 金学智 「文学——心理研究的豐碩成果」『文芸研究』1992. 6.
- ⑤ 芸 原 「極富創造性的的文化探源研究」『社会科学刊』1993. 3.
- ⑥ 蘇雨恒 「文学史研究模式的轉換」『光明日報』1994. 1. 21.
- ⑦ 王星琦 「其知弥精 其所取弥精」『新聞出版報』1994. 2. 25.
- ⑧③⑦ 陶爾夫 「文学—心理批判：文学史学新建構」『河北師範大学学报』（社会科学版）1995. 4. p 15, p 10
- ⑨⑩⑪⑬ 陶爾夫 「文学史的世紀及其四個時期」『中国社会科学』1996. 6. p 156, p 157, p 158
- ⑫⑮⑯⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺ 王鐘陵 『中国中古詩歌史』1993. 江蘇教育出版社 p 1, p 26, p 4. p 5, p 553~, p 31, p 496
- ⑬⑯⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺ 王鐘陵 『文学史新方法論』1993. 蘇州大学出版社 p 1, p 3, p 2, p 14, p 130, p 51, p 17, p 33, p 167~
- ⑰⑱ 彭黎明 「把握我們民族文学研究發展的独特道路」『中国社会科学』1996.6. p 160, p 161
- ⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺ 王鐘陵 「致力于文学史研究新模式的建立」『中国社会科学』1996.6. p 154, p 155
- ㉔ 王鐘陵 「中国古代文論中兩種不同的‘養氣’說」『文芸評論』 総16期
- ㉖ 『聞一多論古典文学』重慶出版社 p 159, p 161
- ㉘ 『海寧王静安先生遺書』

- ⑳許建平 「不失時機地推進建立文学史研究的中国学派」『中国社会科学』1996. 6.
- ㉑㉒徐宗文 「評王鐘陵『中国中古詩歌史』」『江海月刊』1989. 4.
- ㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿㋀㋁㋂㋃㋄㋅㋆㋇㋈㋉㋊㋋㋌㋍㋎㋏㋐㋑㋒㋓㋔㋕㋖㋗㋘㋙㋚㋛㋜㋝㋞㋟㋠㋡㋢㋣㋤㋥㋦㋧㋨㋩㋪㋫㋬㋭㋮㋯㋰㋱㋲㋳㋴㋵㋶㋷㋸㋹㋺㋻㋼㋽㋾㋿㌀㌁㌂㌃㌄㌅㌆㌇㌈㌉㌊㌋㌌㌍㌎㌏㌐㌑㌒㌓㌔㌕㌖㌗㌘㌙㌚㌛㌜㌝㌞㌟㌠㌡㌢㌣㌤㌥㌦㌧㌨㌩㌪㌫㌬㌭㌮㌯㌰㌱㌲㌳㌴㌵㌶㌷㌸㌹㌺㌻㌼㌽㌾㌿㍀㍁㍂㍃㍄㍅㍆㍇㍈㍉㍊㍋㍌㍍㍎㍏㍐㍑㍒㍓㍔㍕㍖㍗㍘㍙㍚㍛㍜㍝㍞㍟㍠㍡㍢㍣㍤㍥㍦㍧㍨㍩㍪㍫㍬㍭㍮㍯㍰㍱㍲㍳㍴㍵㍶㍷㍸㍹㍺㍻㍼㍽㍾㍿㏀㏁㏂㏃㏄㏅㏆㏇㏈㏉㏊㏋㏌㏍㏎㏏㏐㏑㏒㏓㏔㏕㏖㏗㏘㏙㏚㏛㏜㏝㏞㏟㏠㏡㏢㏣㏤㏥㏦㏧㏨㏩㏪㏫㏬㏭㏮㏯㏰㏱㏲㏳㏴㏵㏶㏷㏸㏹㏺㏻㏼㏽㏾㏿㐀㐁㐂㐃㐄㐅㐆㐇㐈㐉㐊㐋㐌㐍㐎㐏㐐㐑㐒㐓㐔㐕㐖㐗㐘㐙㐚㐛㐜㐝㐞㐟㐠㐡㐢㐣㐤㐥㐦㐧㐨㐩㐪㐫㐬㐭㐮㐯㐰㐱㐲㐳㐴㐵㐶㐷㐸㐹㐺㐻㐼㐽㐾㐿㑀㑁㑂㑃㑄㑅㑆㑇㑈㑉㑊㑋㑌㑍㑎㑏㑐㑑㑒㑓㑔㑕㑖㑗㑘㑙㑚㑛㑜㑝㑞㑟㑠㑡㑢㑣㑤㑥㑦㑧㑨㑩㑪㑫㑬㑭㑮㑯㑰㑱㑲㑳㑴㑵㑶㑷㑸㑹㑺㑻㑼㑽㑾㑿㒀㒁㒂㒃㒄㒅㒆㒇㒈㒉㒊㒋㒌㒍㒎㒏㒐㒑㒒㒓㒔㒕㒖㒗㒘㒙㒚㒛㒜㒝㒞㒟㒠㒡㒢㒣㒤㒥㒦㒧㒨㒩㒪㒫㒬㒭㒮㒯㒰㒱㒲㒳㒴㒵㒶㒷㒸㒹㒺㒻㒼㒽㒾㒿㓀㓁㓂㓃㓄㓅㓆㓇㓈㓉㓊㓋㓌㓍㓎㓏㓐㓑㓒㓓㓔㓕㓖㓗㓘㓙㓚㓛㓜㓝㓞㓟㓠㓡㓢㓣㓤㓥㓦㓧㓨㓩㓪㓫㓬㓭㓮㓯㓰㓱㓲㓳㓴㓵㓶㓷㓸㓹㓺㓻㓼㓽㓾㓿㔀㔁㔂㔃㔄㔅㔆㔇㔈㔉㔊㔋㔌㔍㔎㔏㔐㔑㔒㔓㔔㔕㔖㔗㔘㔙㔚㔛㔜㔝㔞㔟㔠㔡㔢㔣㔤㔥㔦㔧㔨㔩㔪㔫㔬㔭㔮㔯㔰㔱㔲㔳㔴㔵㔶㔷㔸㔹㔺㔻㔼㔽㔾㔿㕀㕁㕂㕃㕄㕅㕆㕇㕈㕉㕊㕋㕌㕍㕎㕏㕐㕑㕒㕓㕔㕕㕖㕗㕘㕙㕚㕛㕜㕝㕞㕟㕠㕡㕢㕣㕤㕥㕦㕧㕨㕩㕪㕫㕬㕭㕮㕯㕰㕱㕲㕳㕴㕵㕶㕷㕸㕹㕺㕻㕼㕽㕾㕿㖀㖁㖂㖃㖄㖅㖆㖇㖈㖉㖊㖋㖌㖍㖎㖏㖐㖑㖒㖓㖔㖕㖖㖗㖘㖙㖚㖛㖜㖝㖞㖟㖠㖡㖢㖣㖤㖥㖦㖧㖨㖩㖪㖫㖬㖭㖮㖯㖰㖱㖲㖳㖴㖵㖶㖷㖸㖹㖺㖻㖼㖽㖾㖿㗀㗁㗂㗃㗄㗅㗆㗇㗈㗉㗊㗋㗌㗍㗎㗏㗐㗑㗒㗓㗔㗕㗖㗗㗘㗙㗚㗛㗜㗝㗞㗟㗠㗡㗢㗣㗤㗥㗦㗧㗨㗩㗪㗫㗬㗭㗮㗯㗰㗱㗲㗳㗴㗵㗶㗷㗸㗹㗺㗻㗼㗽㗾㗿㘀㘁㘂㘃㘄㘅㘆㘇㘈㘉㘊㘋㘌㘍㘎㘏㘐㘑㘒㘓㘔㘕㘖㘗㘘㘙㘚㘛㘜㘝㘞㘟㘠㘡㘢㘣㘤㘥㘦㘧㘨㘩㘪㘫㘬㘭㘮㘯㘰㘱㘲㘳㘴㘵㘶㘷㘸㘹㘺㘻㘼㘽㘾㘿㙀㙁㙂㙃㙄㙅㙆㙇㙈㙉㙊㙋㙌㙍㙎㙏㙐㙑㙒㙓㙔㙕㙖㙗㙘㙙㙚㙛㙜㙝㙞㙟㙠㙡㙢㙣㙤㙥㙦㙧㙨㙩㙪㙫㙬㙭㙮㙯㙰㙱㙲㙳㙴㙵㙶㙷㙸㙹㙺㙻㙼㙽㙾㙿㚀㚁㚂㚃㚄㚅㚆㚇㚈㚉㚊㚋㚌㚍㚎㚏㚐㚑㚒㚓㚔㚕㚖㚗㚘㚙㚚㚛㚜㚝㚞㚟㚠㚡㚢㚣㚤㚥㚦㚧㚨㚩㚪㚫㚬㚭㚮㚯㚰㚱㚲㚳㚴㚵㚶㚷㚸㚹㚺㚻㚼㚽㚾㚿㜀㜁㜂㜃㜄㜅㜆㜇㜈㜉㜊㜋㜌㜍㜎㜏㜐㜑㜒㜓㜔㜕㜖㜗㜘㜙㜚㜛㜜㜝㜞㜟㜠㜡㜢㜣㜤㜥㜦㜧㜨㜩㜪㜫㜬㜭㜮㜯㜰㜱㜲㜳㜴㜵㜶㜷㜸㜹㜺㜻㜼㜽㜾㜿㝀㝁㝂㝃㝄㝅㝆㝇㝈㝉㝊㝋㝌㝍㝎㝏㝐㝑㝒㝓㝔㝕㝖㝗㝘㝙㝚㝛㝜㝝㝞㝟㝠㝡㝢㝣㝤㝥㝦㝧㝨㝩㝪㝫㝬㝭㝮㝯㝰㝱㝲㝳㝴㝵㝶㝷㝸㝹㝺㝻㝼㝽㝾㝿㞀㞁㞂㞃㞄㞅㞆㞇㞈㞉㞊㞋㞌㞍㞎㞏㞐㞑㞒㞓㞔㞕㞖㞗㞘㞙㞚㞛㞜㞝㞞㞟㞠㞡㞢㞣㞤㞥㞦㞧㞨㞩㞪㞫㞬㞭㞮㞯㞰㞱㞲㞳㞴㞵㞶㞷㞸㞹㞺㞻㞼㞽㞾㞿㟀㟁㟂㟃㟄㟅㟆㟇㟈㟉㟊㟋㟌㟍㟎㟏㟐㟑㟒㟓㟔㟕㟖㟗㟘㟙㟚㟛㟜㟝㟞㟟㟠㟡㟢㟣㟤㟥㟦㟧㟨㟩㟪㟫㟬㟭㟮㟯㟰㟱㟲㟳㟴㟵㟶㟷㟸㟹㟺㟻㟼㟽㟾㟿㠀㠁㠂㠃㠄㠅㠆㠇㠈㠉㠊㠋㠌㠍㠎㠏㠐㠑㠒㠓㠔㠕㠖㠗㠘㠙㠚㠛㠜㠝㠞㠟㠠㠡㠢㠣㠤㠥㠦㠧㠨㠩㠪㠫㠬㠭㠮㠯㠰㠱㠲㠳㠴㠵㠶㠷㠸㠹㠺㠻㠼㠽㠾㠿㡀㡁㡂㡃㡄㡅㡆㡇㡈㡉㡊㡋㡌㡍㡎㡏㡐㡑㡒㡓㡔㡕㡖㡗㡘㡙㡚㡛㡜㡝㡞㡟㡠㡡㡢㡣㡤㡥㡦㡧㡨㡩㡪㡫㡬㡭㡮㡯㡰㡱㡲㡳㡴㡵㡶㡷㡸㡹㡺㡻㡼㡽㡾㡿㢀㢁㢂㢃㢄㢅㢆㢇㢈㢉㢊㢋㢌㢍㢎㢏㢐㢑㢒㢓㢔㢕㢖㢗㢘㢙㢚㢛㢜㢝㢞㢟㢠㢡㢢㢣㢤㢥㢦㢧㢨㢩㢪㢫㢬㢭㢮㢯㢰㢱㢲㢳㢴㢵㢶㢷㢸㢹㢺㢻㢼㢽㢾㢿㣀㣁㣂㣃㣄㣅㣆㣇㣈㣉㣊㣋㣌㣍㣎㣏㣐㣑㣒㣓㣔㣕㣖㣗㣘㣙㣚㣛㣜㣝㣞㣟㣠㣡㣢㣣㣤㣥㣦㣧㣨㣩㣪㣫㣬㣭㣮㣯㣰㣱㣲㣳㣴㣵㣶㣷㣸㣹㣺㣻㣼㣽㣾㣿㤀㤁㤂㤃㤄㤅㤆㤇㤈㤉㤊㤋㤌㤍㤎㤏㤐㤑㤒㤓㤔㤕㤖㤗㤘㤙㤚㤛㤜㤝㤞㤟㤠㤡㤢㤣㤤㤥㤦㤧㤨㤩㤪㤫㤬㤭㤮㤯㤰㤱㤲㤳㤴㤵㤶㤷㤸㤹㤺㤻㤼㤽㤾㤿㥀㥁㥂㥃㥄㥅㥆㥇㥈㥉㥊㥋㥌㥍㥎㥏㥐㥑㥒㥓㥔㥕㥖㥗㥘㥙㥚㥛㥜㥝㥞㥟㥠㥡㥢㥣㥤㥥㥦㥧㥨㥩㥪㥫㥬㥭㥮㥯㥰㥱㥲㥳㥴㥵㥶㥷㥸㥹㥺㥻㥼㥽㥾㥿㦀㦁㦂㦃㦄㦅㦆㦇㦈㦉㦊㦋㦌㦍㦎㦏㦐㦑㦒㦓㦔㦕㦖㦗㦘㦙㦚㦛㦜㦝㦞㦟㦠㦡㦢㦣㦤㦥㦦㦧㦨㦩㦪㦫㦬㦭㦮㦯㦰㦱㦲㦳㦴㦵㦶㦷㦸㦹㦺㦻㦼㦽㦾㦿㧀㧁㧂㧃㧄㧅㧆㧇㧈㧉㧊㧋㧌㧍㧎㧏㧐㧑㧒㧓㧔㧕㧖㧗㧘㧙㧚㧛㧜㧝㧞㧟㧠㧡㧢㧣㧤㧥㧦㧧㧨㧩㧪㧫㧬㧭㧮㧯㧰㧱㧲㧳㧴㧵㧶㧷㧸㧹㧺㧻㧼㧽㧾㧿㨀㨁㨂㨃㨄㨅㨆㨇㨈㨉㨊㨋㨌㨍㨎㨏㨐㨑㨒㨓㨔㨕㨖㨗㨘㨙㨚㨛㨜㨝㨞㨟㨠㨡㨢㨣㨤㨥㨦㨧㨨㨩㨪㨫㨬㨭㨮㨯㨰㨱㨲㨳㨴㨵㨶㨷㨸㨹㨺㨻㨼㨽㨾㨿㩀㩁㩂㩃㩄㩅㩆㩇㩈㩉㩊㩋㩌㩍㩎㩏㩐㩑㩒㩓㩔㩕㩖㩗㩘㩙㩚㩛㩜㩝㩞㩟㩠㩡㩢㩣㩤㩥㩦㩧㩨㩩㩪㩫㩬㩭㩮㩯㩰㩱㩲㩳㩴㩵㩶㩷㩸㩹㩺㩻㩼㩽㩾㩿㪀㪁㪂㪃㪄㪅㪆㪇㪈㪉㪊㪋㪌㪍㪎㪏㪐㪑㪒㪓㪔㪕㪖㪗㪘㪙㪚㪛㪜㪝㪞㪟㪠㪡㪢㪣㪤㪥㪦㪧㪨㪩㪪㪫㪬㪭㪮㪯㪰㪱㪲㪳㪴㪵㪶㪷㪸㪹㪺㪻㪼㪽㪾㪿㫀㫁㫂㫃㫄㫅㫆㫇㫈㫉㫊㫋㫌㫍㫎㫏㫐㫑㫒㫓㫔㫕㫖㫗㫘㫙㫚㫛㫜㫝㫞㫟㫠㫡㫢㫣㫤㫥㫦㫧㫨㫩㫪㫫㫬㫭㫮㫯㫰㫱㫲㫳㫴㫵㫶㫷㫸㫹㫺㫻㫼㫽㫾㫿㬀㬁㬂㬃㬄㬅㬆㬇㬈㬉㬊㬋㬌㬍㬎㬏㬐㬑㬒㬓㬔㬕㬖㬗㬘㬙㬚㬛㬜㬝㬞㬟㬠㬡㬢㬣㬤㬥㬦㬧㬨㬩㬪㬫㬬㬭㬮㬯㬰㬱㬲㬳㬴㬵㬶㬷㬸㬹㬺㬻㬼㬽㬾㬿㭀㭁㭂㭃㭄㭅㭆㭇㭈㭉㭊㭋㭌㭍㭎㭏㭐㭑㭒㭓㭔㭕㭖㭗㭘㭙㭚㭛㭜㭝㭞㭟㭠㭡㭢㭣㭤㭥㭦㭧㭨㭩㭪㭫㭬㭭㭮㭯㭰㭱㭲㭳㭴㭵㭶㭷㭸㭹㭺㭻㭼㭽㭾㭿㮀㮁㮂㮃㮄㮅㮆㮇㮈㮉㮊㮋㮌㮍㮎㮏㮐㮑㮒㮓㮔㮕㮖㮗㮘㮙㮚㮛㮜㮝㮞㮟㮠㮡㮢㮣㮤㮥㮦㮧㮨㮩㮪㮫㮬㮭㮮㮯㮰㮱㮲㮳㮴㮵㮶㮷㮸㮹㮺㮻㮼㮽㮾㮿㯀㯁㯂㯃㯄㯅㯆㯇㯈㯉㯊㯋㯌㯍㯎㯏㯐㯑㯒㯓㯔㯕㯖㯗㯘㯙㯚㯛㯜㯝㯞㯟㯠㯡㯢㯣㯤㯥㯦㯧㯨㯩㯪㯫㯬㯭㯮㯯㯰㯱㯲㯳㯴㯵㯶㯷㯸㯹㯺㯻㯼㯽㯾㯿㰀㰁㰂㰃㰄㰅㰆㰇㰈㰉㰊㰋㰌㰍㰎㰏㰐㰑㰒㰓㰔㰕㰖㰗㰘㰙㰚㰛㰜㰝㰞㰟㰠㰡㰢㰣㰤㰥㰦㰧㰨㰩㰪㰫㰬㰭㰮㰯㰰㰱㰲㰳㰴㰵㰶㰷㰸㰹㰺㰻㰼㰽㰾㰿㱀㱁㱂㱃㱄㱅㱆㱇㱈㱉㱊㱋㱌㱍㱎㱏㱐㱑㱒㱓㱔㱕㱖㱗㱘㱙㱚㱛㱜㱝㱞㱟㱠㱡㱢㱣㱤㱥㱦㱧㱨㱩㱪㱫㱬㱭㱮㱯㱰㱱㱲㱳㱴㱵㱶㱷㱸㱹㱺㱻㱼㱽㱾㱿㲀㲁㲂㲃㲄㲅㲆㲇㲈㲉㲊㲋㲌㲍㲎㲏㲐㲑㲒㲓㲔㲕㲖㲗㲘㲙㲚㲛㲜㲝㲞㲟㲠㲡㲢㲣㲤㲥㲦㲧㲨㲩㲪㲫㲬㲭㲮㲯㲰㲱㲲㲳㲴㲵㲶㲷㲸㲹㲺㲻㲼㲽㲾㲿㳀㳁㳂㳃㳄㳅㳆㳇㳈㳉㳊㳋㳌㳍㳎㳏㳐㳑㳒㳓㳔㳕㳖㳗㳘㳙㳚㳛㳜㳝㳞㳟㳠㳡㳢㳣㳤㳥㳦㳧㳨㳩㳪㳫㳬㳭㳮㳯㳰㳱㳲㳳㳴㳵㳶㳷㳸㳹㳺㳻㳼㳽㳾㳿㴀㴁㴂㴃㴄㴅㴆㴇㴈㴉㴊㴋㴌㴍㴎㴏㴐㴑㴒㴓㴔㴕㴖㴗㴘㴙㴚㴛㴜㴝㴞㴟㴠㴡㴢㴣㴤㴥㴦㴧㴨㴩㴪㴫㴬㴭㴮㴯㴰㴱㴲㴳㴴㴵㴶㴷㴸㴹㴺㴻㴼㴽㴾㴿㵀㵁㵂㵃㵄㵅㵆㵇㵈㵉㵊㵋㵌㵍㵎㵏㵐㵑㵒㵓㵔㵕㵖㵗㵘㵙㵚㵛㵜㵝㵞㵟㵠㵡㵢㵣㵤㵥㵦㵧㵨㵩㵪㵫㵬㵭㵮㵯㵰㵱㵲㵳㵴㵵㵶㵷㵸㵹㵺㵻㵼㵽㵾㵿㶀㶁㶂㶃㶄㶅㶆㶇㶈㶉㶊㶋㶌㶍㶎㶏㶐㶑㶒㶓㶔㶕㶖㶗㶘㶙㶚㶛㶜㶝㶞㶟㶠㶡㶢㶣㶤㶥㶦㶧㶨㶩㶪㶫㶬㶭㶮㶯㶰㶱㶲㶳㶴㶵㶶㶷㶸㶹㶺㶻㶼㶽㶾㶿㷀㷁㷂㷃㷄㷅㷆㷇㷈㷉㷊㷋㷌㷍㷎㷏㷐㷑㷒㷓㷔㷕㷖㷗㷘㷙㷚㷛㷜㷝㷞㷟㷠㷡㷢㷣㷤㷥㷦㷧㷨㷩㷪㷫㷬㷭㷮㷯㷰㷱㷲㷳㷴㷵㷶㷷㷸㷹㷺㷻㷼㷽㷾㷿㸀㸁㸂㸃㸄㸅㸆㸇㸈㸉㸊㸋㸌㸍㸎㸏㸐㸑㸒㸓㸔㸕㸖㸗㸘㸙㸚㸛㸜㸝㸞㸟㸠㸡㸢㸣㸤㸥㸦㸧㸨㸩㸪㸫㸬㸭㸮㸯㸰㸱㸲㸳㸴㸵㸶㸷㸸㸹㸺㸻㸼㸽㸾㸿㹀㹁㹂㹃㹄㹅㹆㹇㹈㹉㹊㹋㹌㹍㹎㹏㹐㹑㹒㹓㹔㹕㹖㹗㹘㹙㹚㹛㹜㹝㹞㹟㹠㹡㹢㹣㹤㹥㹦㹧㹨㹩㹪㹫㹬㹭㹮㹯㹰㹱㹲㹳㹴㹵㹶㹷㹸㹹㹺㹻㹼㹽㹾㹿㺀㺁㺂㺃㺄㺅㺆㺇㺈㺉㺊㺋㺌㺍㺎㺏㺐㺑㺒㺓㺔㺕㺖㺗㺘㺙㺚㺛㺜㺝㺞㺟㺠㺡㺢㺣㺤㺥㺦㺧㺨㺩㺪㺫㺬㺭㺮㺯㺰㺱㺲㺳㺴㺵㺶㺷㺸㺹㺺㺻㺼㺽㺾㺿㻀㻁㻂㻃㻄㻅㻆㻇㻈㻉㻊㻋㻌㻍㻎㻏㻐㻑㻒㻓㻔㻕㻖㻗㻘㻙㻚㻛㻜㻝㻞㻟㻠㻡㻢㻣㻤㻥㻦㻧㻨㻩㻪㻫㻬㻭㻮㻯㻰㻱㻲㻳㻴㻵㻶㻷㻸㻹㻺㻻㻼㻽㻾㻿㼀㼁㼂㼃㼄㼅㼆㼇㼈㼉㼊㼋㼌㼍㼎㼏㼐㼑㼒㼓㼔㼕㼖㼗㼘㼙㼚㼛㼜㼝㼞㼟㼠㼡㼢㼣㼤㼥㼦㼧㼨㼩㼪㼫㼬㼭㼮㼯㼰㼱㼲㼳㼴㼵㼶㼷㼸㼹㼺㼻㼼㼽㼾㼿㽀㽁㽂㽃㽄㽅㽆㽇㽈㽉㽊㽋㽌㽍㽎㽏㽐㽑㽒㽓㽔㽕㽖㽗㽘㽙㽚㽛㽜㽝㽞㽟㽠㽡㽢㽣㽤㽥㽦㽧㽨㽩㽪㽫㽬㽭㽮㽯㽰㽱㽲㽳㽴㽵㽶㽷㽸㽹㽺㽻㽼㽽㽾㽿㿀㿁㿂㿃㿄㿅㿆㿇㿈㿉㿊㿋㿌㿍㿎㿏㿐㿑㿒㿓㿔㿕㿖㿗㿘㿙㿚㿛㿜㿝㿞㿟㿠㿡㿢㿣㿤㿥㿦㿧㿨㿩㿪㿫㿬㿭㿮㿯㿰㿱㿲㿳㿴㿵㿶㿷㿸㿹㿺㿻㿼㿽㿾㿿

1995. 3.
- ㉞周楚之 「王鐘陵与『中国中古詩歌史』」台湾『国語日報』1991. 2. 28.

補記：本論は王鐘陵氏との誼もあって起案の段階で石川が少しく助言した他は、一切趙の手によって成る。学海に益するもの、それはすべて趙の功績に帰す。